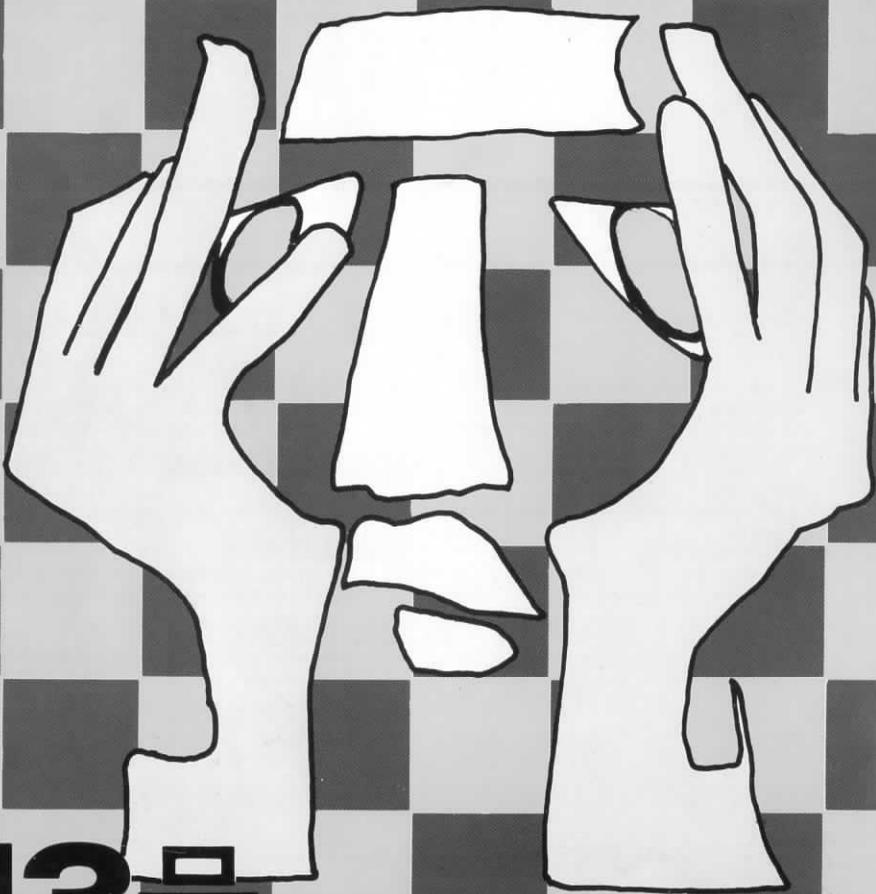


季刊

# アナキズム

## 特集 革命の新たな構想



# 13号

アナキズム 第十三号 一九七六年十二月一日(季刊・年四回) 特集 革命の新たな構想

### クロンシュタット 1921

ポール・ラブリッチ著 菅原崇光訳 二四〇〇円  
ロシア革命は初期にすでに頹廢の兆をほらんだ。それは一九一七年一〇月の理想が踏みこじられるという歴史を印した。『革命の誇りと栄光』をかかげ真実のコミュニューンのための闘い、クロンシュタットの全貌をあかす。

### 大杉栄選 各二〇〇円

芸術行為と、政治活動を一身に交又させて、直接行動の生を全身的に突き進んだアナキスト大杉栄の巨きな遺産の集約する。熱情あふれる名文として著名な『青年に訴う』他

### 青年に訴う

### 無政府主義の哲学 I

### 無政府主義の哲学 II

### 日本脱出記・獄中記

大沢正道著 アナキズム思想史 一三〇〇円

### 秋山清詩集

自らに深くその軌跡を踏み、状況への風化を確固として拒みぬく詩人が、日常性の底へ浸透させ生への執着によって彫琢した詩語によりうたいあげた全詩の集成。解説吉本隆明他

### 現代思潮社

東京都文京区小日向 1-24

電話 (03)943-4406 振替 東京 1-72442

パレスチナからの最新レポート!

### 広河隆一

## パレスチナ 幻の国境

草思社 東京都渋谷区神宮前4-24-10 電話03-470-6565 振替東京7-23552

パレスチナ国家の誕生が目前に迫ってきたが、それはパレスチナ問題を解決する上で、どのような意味を持つのだろうか。著者は、十月戦争を契機に大きく転回しはじめたイスラエルの状況を、左翼から右翼に至るさまざまなユダヤ人、及び占領地を含むパレスチナ・アラブ人の双方からの取材を通じて明らかにする。自立に向かって立ち上がったパレスチナ・アラブ人は、果たしてユダヤ国家建設の物語から、何を学ぶか。彼らは国境を幻にしようか。史上かつてなかった試みが、パレスチナでなされようとしている。定価一三〇〇円

### ユダヤ国家とアラブゲリラ

広河隆一 シオニズムとその対アラブ政策の歴史を発掘検証した定評ある名著。九八〇円

定価 400円

1976年12月

# 季刊 アナキズム 13号

アナキズム編集委員会

ブルードンの思想 その現代的意義を求めて	長谷川 進	2
男と女の開かれた関係 <連載2>	秋山 清	52

### <特集 革命の新たな構想>

革命の新しいイメージ マルクス・レーニン主義に代わるもの	江口 幹	9
革命の再定義 古典的マルクス主義の終焉	ポニル・カニダン	15
自主管理社会の構想 ブルードン主義的自主管理論のために	大橋正義	25
日本における革命論の現状 広松渉『現代革命論への模索』について	奥沢邦成	30

### 論潮

現場の復権をめざして	山本晴代	41
中国革命とそれにつづくもの	ペン・ムウト	48
新農本=アナーキー論 農業理論の構築にむけて	柏木令二	58
リップの歩み [年表構成] (2)	北川ちか子	69
クロンシュタット・イズヴェスチャ 最終回	吉原文明訳	73
潮流 (7~9月) 38	編集後記 78	

## 戦後アナキズム運動試論

★久保 隆著

吉本隆明、植谷雄高をはじめとする60年以降の思想的営為は、戦後アナキズム運動にとってなんでもあったか。旧来の「アナキズム」に訣別を告げ、新たな論理を構築せんとする俊英の書き下し評論集。発売中。▼定価一〇〇〇円

## 反逆の信條

★秋山 清著

幸徳秋水、大杉栄、古田次郎、石川三四郎らの思想と行動をたどるとともに、60年代の「直接行動」の理念を凝視し、ニヒリズムとアナキズム、テロリズムとヒューマニズムの問題を論究した大著。▼定価一〇〇〇円

## 夢と祈禱師

★鈴木清順著

色彩感覚豊かな映画監督が綴る珠玉のエッセイ集。村木源次郎、中浜哲らの生き様を素材に「哀しみ」の根源に迫る。未発表対談(秋山清・菅孝行)を収録。▼定価一五〇〇円

## 殲滅・中島貞夫の映画世界

「日本暗殺秘録」において、左右のテロリストの人間像をとらえた中島映画の本質に迫る。中島監督の書き下しエッセイ、インタビューに、未発表「ナリオ殲滅」「ジーンズ・ブルース」を収録。▼定価八五〇円

## わが夢二

★秋山 清著

画家であり詩人であった竹久夢二の人気の秘密を解く。▼定価一六〇〇円(直接当社へお申込みの場合は、送料(各一〇〇円)を加えてご送金下さい)

〒103 東京都目黒区大橋一の四の一〇  
TEL(03)六二八八 振替東京五二二〇四五三  
北冬書房

## 海燕書房

### ドストエフスキイと日本文学

新谷敏三郎著 ロシア文学研究の枠をこえ、実践的方法論を駆使して文学の本質へと迫る 1600円

### ドストエフスキイの方法

新谷敏三郎著 作品の構造分析を通じてドストエフスキイの秘密を明かす著者の第一論集 1600円

### アナキスト詩集

秋山清編 萩原恭次郎、岡本潤から向井孝に至る10人のアナキスト詩人の初作の作品集 1800円

### 佇む 心やさしき反逆

秋山清対談集 独自の批判精神に貫かれた対話から浮び上がるアナキスト詩人の生きざま 960円

### 蜂起と夢と伝説

田村正敏著 全共闘はどこへ行ったのか。低迷する状況の中で私達は、いま何を問うのか? 1200円

### 『青鞥』の女たち

井手文子著 最初の自立的な女性誌「青鞥」の検証を通じて、女にとっての「近代」を問う 1200円

### 大杉栄書簡集

飛鳥井雅道解説 革命家大杉栄のナイーブで果敢な生の軌跡と豊かな可能性を示す書簡集 1500円

### 日本無政府共産党

相沢尚夫他著 レーニン主義とアナキズムの止揚を試みた幻の「党」の理論と実践の記録 1500円

### 労働者反対派

コロタイ他/立原信弘解説 党・官僚主導型支配に抗する労働者自主生産管理思想の原像 近刊

### 近世暴動反逆変乱史

梅原北明編/鹿野政直解説 エロスの先駆者が民衆の反逆を当時の新聞に探った資料集成 1400円

### 近世社会大驚異全史(復刻版)

梅原北明編 明治・大正期の社会史の史料として不可欠の大著 32,000円(76年4月末まで特価28,000円)

### 自由聯合・自由聯合新聞(復刻版)

「自由聯合・自由聯合新聞」復刻版刊行会刊 小松隆二解説 限定300部/残部僅少 12,000円

東京都千代田区内神田1-4-6 三洋ビル  
電話 03 (293) 9931 振替/東京4-118229

# ブルードンの思想

## その現代的意義を求めて

長谷川 進

表題は大まかですが、狙いはブルードンの現代的意義をつかむことにあります。まだ的確に答えられそうもありませんが、話し全体をおしっていくらかでも示唆することができたらと思うだけです。

ご存知のように、最近日本でも二巻のブルードン研究が相次いで出版されました。いずれもすぐれた高度な学問的な研究でして、現実的・実践的意義への問いかけは意図してないかも知れませんが、読み易いようによっては、そうした点も汲みとれると思います。

私もブルードン思想の主要な特質をたどり、必要に応じマルクスとくらべながら、その現代的意義づけを考へることにしますが、まずブルードンの考への一般的特質を見ることがとします。

### 思想・理念の一般的特質

これは今更不問かも知れないが、項目的に羅列すると、個人と同時に集団・社会の自主・自由の要求、正義・平等の理念、イデオ・レアリスム、すなわち理念的要素を重視するとともに現実主義・経験主義を基調

とする。反権威・権力主義、多元主義もしくは多中心主義、相互主義、連合主義。

これらはある方法・理論によって互いに関連づけられ、一貫した体系をなしているといえそうです。一貫した体系といっても、それは固定したものではありません、それどころか、ブルードンは時には説を変え、あるいは盗みであるといいつつながら、同じ書物で所有は自由(実は自由の保証)であるともいつているのです。これは一見明らかに矛盾ですが、実は同じ所有といつてもその内実は異なるのに、それを無条件に表現するのがブルードンの悪い癖です。つまり前の場合の所有は不労取得ないし他人労働の搾取をもたらすのに対し、後の場合はそれをもたらさない占有を指すわけです。しかしブルードンの所有論はなかなか複雑でこれだけではつきませんが、ブルードンにおける矛盾撞着や変説と見られるものは、むしろ複雑多岐、多様・多元と目する現実に対する態度、複雑な現実を単純化することなくとらえようとする態度にもつき、この点でマルク

スとちがいが、マルクスのブルードンに対する「生ける矛盾」という評言は皮相であろうと思います。

### 方法論

ブルードンはマルクスに先立って一八四〇年の『所有とは何か』で、自己の社会主義を「科学的社會主義」と称し、他の社会主義者たちを「ユートピア的」と批判し、また「経済科学」、「社会科学」の樹立を志しました。こうしたブルードンの科学的方法論をなすものが系列の理論または法則であるといわれます。これについては、佐藤茂行氏の『ブルードン研究』に詳しい解説がありますが、まだよくこなすことができないので、いまは省略します。

この系列の理論に関連してブルードンの弁証法は系列弁証法とよばれますが、また均衡弁証法ともいわれます。この呼び名はそれがヘーゲルやマルクスの弁証法とちがうことを示し、ちがいはヘーゲルの総合を認めないことにあります。マルクスはブルードンにヘーゲルの総合を「注入」したといっていますが、ブルードンはマルクスを知る前からヘーゲルのことは知っており、初めは大きな影響を受けましたが、のちには離れ、ヘーゲルの総合を「政府万能主義的」として斥けました。その根本には、ヘーゲル的一元論とは反対に、精神的世界および物質的世界のすべては、対立し、しかも相互に還元できない諸要素から成り立つとする多元論的実在観があります。対立し矛盾する諸要素の解消・総合に代えてブルードンが認めるのは、これら要素の間の均衡、しかも動的・一時的な均衡です。それは単なる折衷や中庸ではなく、さきの諸理念の働

きによって方向づけられた均衡、「反権威的均衡」(アンサー)です。この考へは次の社会理論にも関連するが、多元主義や均衡の理論は、あとでとりあげるブルードンの相互主義や連合主義の根拠をなしていると思われま

### 社会の理論

ブルードンは社会学者、社会学の先駆者として早くから認められ、そうした書物も数種出版されています。たしかにブルードンには、今日の学問的水準からしてもりっぱに通用するいくつかの理論があり、それらは彼の社会思想・アナキズムを構成する要素をなし、また実践を方向づけることにもなっていると思えます。

まず集合力、集合存在、集合理性の三つをとりあげます。集合力の理論はアダム・スミスの分業論から学んだものといわれるが、これを最初に論じた『所有とは何か』では集合力の作用に所有者・資本家の労働者に対する搾取の根源を指摘したのです。つまり、何人かの者が集まっていっしょに分業的に仕事をする場合、一人一人が別々に働いた仕事の量の算術的総和よりもはるかに多くの量の仕事をなしとげることができる。ところが、資本家は個々の労働者の仕事分に対して賃金を支払うだけであって、集合分には支払っていないというわけです。

しかしこれは集合力理論の一帰結にすぎません。もっと一般的には、集団・社会は個々人の単なる寄せ集めではなく、独自の存在であるという社会学理論を意味するわけです。独自の存在として集合力を十二分に発揮する集団がブルードンの集合存在であり、構成する個々人の自由な

活動を前提とします。かくしてブルードンは個人の独立・自主・自由を基調としながらも超個人的な集団・社会の独自性を認め、いわゆる社会名目論、社会実在論のいずれにもおちいっていません。

ブルードンがたんなる個人主義者でないことは、集合理論の考えにもよく表わされています。集合理性とは、本来の集合存在のものつ属性であり、個人理性の集まりをいうのですが、ブルードンによると、個人の意識、考え方にはどうしても偏りがある。複数の人々がそれぞれ考えを自由に発表し合い、討論することによって主観的な偏りが消去され、より公正な意見が生まれ、かくして集合性ないし公共理性が成り立つとするわけです。そしてこの集合理性は集合力の働きや集合存在のあり方を正しく規定するものと考えられるし、またブルードンに限りませんが、そのアナキズムは個人と集団の自主性・創造性にかんするこうした考えにもとづくと思えます。

ブルードンにはもう一つ集団・社会について重要な理論があります。それは「手帳」にわずか半ページにすぎないものだが含蓄深く、最初の個所だけ引用します。

社会は、公認のものであるか、それとも真実のものであるか。公認の社会とは、われわれが見かけるとおりの社会であり、この見かけに対して、ビタゴラス、ソクラテス、イエスおよびすべてのユートピストたちがわかるがわる怒りをぶちまけてきた。真実の社会は、絶対かつ不動の法則にしたがって生き、発展する社会である。この社会こそは、その生命によって、われわれが社会と呼んでいる、この一時の化膿したかさぶたを維持しているのである。

ゲルスにもあります。しかし彼らの考え方の中心は階級的視点、階級対立・闘争にあり、国家の本質を階級支配の手段と規定します。そして階級の見方そのものも単純化されていますが、とにかく階級の廃止とともに国家も廃止されるとし、それへの過程において国家という支配手段をプロレタリアート解放のために不可欠と考えたことはいうまでもありません。

しかし国家・権力を手段とする社会変革・解放の方針は、「政府万能主義」としてブルードンがもっとも激しく斥けたことはよく知られています。ブルードンは旧体制の破壊と同時に新体制の建設を考え、この点にむしろ重きをおいたと見られますが、国家の問題についても同様です。社会力の疎外を可能にする所以のものを民衆・被支配者の側にも求め、それを人々の自治能力の欠如、権威・権力への依頼心にあるとするわけです。そこで、国家という人間抑圧の権力組織を廃絶するには、人々の自治能力を養うこと、それを養い実践するような、したがって国家を不要化するような自由平等な組織、あとで述べる相互主義・連合主義組織交換銀行、労働者コンビニー等を、現存秩序のなかでも可能なかぎり形成すること、これがブルードンの方針ではなかったかと思われまします。これはむしろいゆる体制変革をぬきにしての考えではなく、むしろ変革をより有効ならしめるための配慮・方策であり、この考えは、とくにランダウアー、ブーバーに受けつがれていると思えます。

ところが、ブルードンの国家論はかなり複雑で一筋縄では片がつかまいません。初期には国家の廃絶、経済力組織化の中への解消を説くに急であつたのですが、のちには連合主義体制の中で国家の実在性と役割を認め

公認の社会はますます消滅し、真実の社会にその純粹の輝きを発揮させる傾向にある。古い仮面のこの消滅はわれわれには進歩のように見えるけれども、それは根本においては破壊である。

説明の必要はないかも知れないが、大体はこういう意味であらう。一般にそれと認められている社会ないし集団は、真実の、そうあるべき、またありうるものではない。真実の社会は、それにいわば寄生するかさぶたのような公認社会のために蔽われ、歪められ、そこではさきの集合力、集合理性は、一部の者の支配・搾取の手段に利用されている。両者は別種の社会というよりも同じ社会の別の層をなすと解される。公認の社会を排除して本来の社会・集団を取り戻すこと、これがブルードンにおける社会革命である。国家を例にしてそれを考えることにします。

## 国家

国家は公認社会の典型といえましよう。一八四九年にブルードンは、ルイ・ブランおよびビエール・ルルーとの論争「革命への抵抗」で、「国家とは社会力の外的構成体である」と述べています。つまり国家は、自発的な社会生活の所産である社会力すなわち集合力が社会に対して外部的対立的存在として組織化される場所に成り立ち、この組織化は、所有制度を基礎として階層的・権威主義的に構成され、これに適応し、これを支える心性・観念も育成され、この役割を果たすものが、ブルードンによると、宗教・教会であることになりました。

国家は社会の中から生まれながらその外に、その上に立ち、それを支配し、しかも社会に寄生する存在であるとする見方は、マルクス、エンゲルスにもあります。これは連合主義理論の建前からすれば当然かも知れません。しかし国家を称しても、それは旧来の集権国家ではなく、権力・機能を高度に分散化された国家です。その役割については、説明に明確でない点もありますが、一般には物事を発意し、刺戟を与えることであつて、実行は他の自発的集団に任せるべきだと考えているようです。現実主義者のブルードンは、単に国家廃止を語るだけではなく、国家に代つて全体社会の利害をいかにによりよく調整すべきかを考えたわけですが、国家は相互主義・連合主義組織の発展とともに死滅すべきであり、かくしてブルードンは究極においては政治的国家的消滅を考えたものと思えます。さきにブルードンにおける社会革命は公認社会からの真実の社会の解放であるといったが、同じこととなるが、国家を常に全体社会との関連で問題にしたブルードンにとって、革命とは社会を国家から解放することだともいえるでしょう。

ここで階級の問題にふれることにします。

## 階級の問題

ブルードンも、マルクスと同様に、階級の問題をくわしくは論じていないといわれるし、あるいはマルクス以上に不明確であるというべきかも知れません。しかし階級・階級闘争の考えは、マルクスほどではないにしても、ブルードンにおいてもかなり重要な地位を占めています。その意味合いにはちがいがありません。

ブルードンは主要な階級としてブルジョア階級、中間階級、プロレタリア階級（労働者階級）の三つを数え、初期にはこのうちとくに中間階

級を重視しました。中間階級とは、自己の労働によって生活し、その利益をすべて自分のものとするとともに損失に対しては自ら責任を負う点でプロレタリアと異なり、これに属するのは企業者、親方、商店主、製造業者、農民、学者、芸術家等々であるとしています。

そしてブルードンはこの中間階級の「中庸と自由の精神」を称え、「革命の問題は第一の階級と第三の階級とを第二の階級に吸収することである」とまで述べ、「一九世紀における革命の一般理念」の冒頭で、「ブルジョアジーに」生産者階級との連帯を呼びかけているのも、この考えから出たものです。

しかし現実には、二月革命は中間階級の増大を目標としたというブルードンの予想に反し、一八五一年のクーデター以後中間階級は押しつぶされたとしてその後中間階級消滅論を唱え、遺著『労働者階級の政治的能力』では「現代社会の二つの階級、賃金労働者の階級と地主・資本家・企業家の階級とへの分裂は明白な事実である」と述べています。

これだけだと、ブルードンもマルクスと同じに、資本主義社会における階級分裂・闘争の激化を説いてるかにとれます。しかし表面的な類似にもかかわらず根本のちがいがあります。まずともに解放を自ざすプロレタリアの概念そのものが同じではありません。アンサーも指摘しているように、プロレタリアートはブルジョア社会において排除・疎外され、ますます窮乏化されてゆく意味での階級、それとともに階級意識を尖鋭化し闘争を激化するかぎりでの階級であり、闘争は第一義的には政治闘争であり、したがってその指導・統一に当たる前衛政党が中心的役割を果

すこととなります。さらにマルクスによると、プロレタリアートは歴史の必然法則によって特殊の使命、いわば勝利者たるべき使命を担っている。かくしてそれを代弁するマルクス主義には何か勝者・強者の論理といったものが暗に働くことにはしまいかと思えます。

これに対してブルードンの立場は常に純然たる労働者・生産者の立場であり、現代ドイツのアナキズム学者ペーター・ハインツによると、「ブルードンは、マルクスのようにやがて勝利者たるべき階級に自己を賭けるのではなく、常に抑圧されている人々の傍に身を置いて考えた」といっています。

さらに決定的なちがいは、ブルードンが、マルクスのように二大階級の対立・闘争から階級独裁の理論を導き出さないことにもあります。上記の、現代社会における二階級への分裂を指摘したすぐあとで、「正義と経済の準則をもっともよく適用することによって、この危険な分裂を無くし、これら二つの新しい階級を一つの、まったく同じ水準の均衡した階級に引き戻すことができないうか」を問うています。マルクスとのちがいはあまりにも大きく、ここにもプチブルと批判される理由がありそうです。しかしこれは、さきの弁証法にもとづく相互の考え方と問題意識のちがいが、さらに人間的な何かのちがいに根ざしているのではないかも考えられます。すでに述べたように、ブルードンの主たる経済的実践は、相互主義的経済組織、要するに生産協同組合の建設にあつたと見られます。たとえば早くも二月革命のさい、パリやリヨンで、民衆の間から自発的に多数の労働者生産組合が結成されたとき、ブルードンはそれを政治革命より「はるかに革命的な事実」であると、同様の



組織が他の各地にも結成されることを奨励したといわれます。また一八四八年の「選挙宣言」でも交換銀行に関連して、「組合を結成し、あるいは結成途上にあるわれわれ生産者は、われわれの交換を組織するのに、国家も強制的通貨も必要としない。せんじつめると、国家による信用は資本による信用であつて労働によつた信用ではなく、常に君主制であつてデモクラシーではないからである」と述べています。ちなみにブルードンの交換銀行は、一八四九年一月二万七千名の参加者を集めながら成果を見ずに数ヶ月でつぶれたのであるが、経済建設の資金面の役割を担うものとして今も大いに研究に値すると思われまふ。

ところで、協同組合といへば、マルクスも「国際労働者協会創立宣言」で、資本の経済に対する労働の経済の偉大な勝利を意味するものとして協同組合運動の重要さを強調し、さらにそれが勤労大衆を解放するためその組織を国民の資金で助成し、国民的な規模で発展させることが必要であると述べたあと、こう述べています。「したがって今や政治権力を獲得することが労働者の偉大な義務となつた」と。これをどう理解したらよいのでしょうか。

その後、直接マルクスからではないにせよ、マルクスの上記のような教えに従つて政治権力を獲得し、それを手段として社会主義・共産主義を建設するというやり方はすでに多くの国々で実施されてきましたが、その現実はどうか。こと将来に関してはマルクスは高度に抽象的なことしか述べていませんが、国家による社会主義建設という方針はマルクス主義の動かぬ本領でして、それをブルードンは直接問題にしてはいませんが、そのジャコバン主義・政府万能主義攻撃はマルクス主義にもあて

はまるでしょう。たとえば一八四九年の「一革命家の告白」でこう述べています。

社会主義はジャコバン主義の幻想につかっている。二千年前の聖なるプラトンもその悲しむべき一例であつた。サン・シモン、フリーエ、オウエン、カベ、ルイ・ブランはみな国家による、資本による、なんらかの権威による労働の組織の支持者であり、……上からの革命に訴えている。彼らは民衆に、みづから組織し、自己の経験と理性とに訴えることを教える代りに、権力を要求している。彼らは専制主義者とうちがうのか。

このような方途によつてもたらされた今日の集権的社会主義・共産主義——ソ連、中国、東欧からいゆる第三世界のほとんどすべてにわたる——の現実こそは、真に下からの革命、分権制を基本とするブルードン思想の現代的意義を裏つけていると見る事ができるでしょう。

下からの自主的解放を説くブルードンにおいて労働者階級の自覚が要求されるのは当然で、これが最後の著述で論じた政治的能力の問題です。

### 政治的能力

ごくかんたんにはこう説明されています。「政治的能力をもつとは、集団の成員としての自己を意識し、それから生ずる理念を確認し、その理念の実現を追求することである」と。つまり集団的自覚(階級意識)、理念、実現追求の三つから成るが、中心的要素は理念にあり、ブルードンのいう理念とは要するに相互主義と連合主義とを意味し、両者は原理的には共通し、建設すべき新経済秩序の原理が相互主義または相互性、

政治的次元における相互主義が連合主義です。

相互主義の思想は初期の著書から芽生えています。大成されたのは『政治的能力』においてであり、連合主義は主として後年にとりあげられ、『連合の原理』で評論されています。ともに邦訳があるのでかんたんにします。

実は私としてはまだすっきりしない点があります。相互性とは、語原的には交換、それも独立・自由な生産主体間の生産物やサービスの交換を意味し、それはまた物質的保証によって正義の原理をうち立てることを目的とすると説明されています。とすると、独立の生産主体とは、よく批判されるように、職人や農民など小生産者だけを指すことになりそうです。ところが、別の場所では結合労働を必要とする産業や事業について、それを「それに参加する人々の共同不可分の所有である」とも述べており、ここでは共有制を認めているようにとれます。とにかくブルードンにおける所有の問題は複雑で、結論的なことはまだいえません。なんらかの共有制は認められ、新経済体制としての「農工連合」にはそれが含まれているのではないかと思えます。この問題はのちにクロポトキンによって大いに発展せしめられています。

次に連合主義。連合主義は種々の集団について成り立つが、もっとも基礎的なものはコミュニティに思えます。コミュニティは、ブルードンによると「自然的集団」の一つであり、自然的集団とは、人々が一つの場所を共にし、居住を接し、近隣関連を結び、文化を共にするところに形成されるという。これは広狭さまざまなのが考えられるが、基本は上述のように地域自治体としてのそれであって、こう説明し

ています。

コミュニティは、本質において、人間のよう、家族のよう、知的・道徳的で自由なすべての個体および集合体のように、主権的存在である。この資格においてコミュニティは、自己を治め、自己を管理し、税を課し、財産と収入を処分し、青少年のために学校を設け、教員を任命し、治安を維持し、憲兵と国民軍を設ける等の権利、裁判官を任命し、新聞を刊行し、集会を開き、個々の結合社会をつくり、倉庫や銀行をもつ等の権利を有する。

呑み込めぬ節もありますが、コミュニティが種々の重要な公共機能を営み、このコミュニティを基礎とする地方的、全国的連合が国家秩序に代る自由な秩序を形成し、このような全国的秩序の連合もしくは連邦がナショナルリズム原理・ネーション国家体制に代る別の形の国際秩序を構成すると見るのが、ブルードンの構想であったと考えます。

そしてこのような真の下からの分権的直接民主体制を補い、支えるのが、生産その他の経済面における自主管理体制であり、いわゆる自主管理社会主義はブルードン思想の中で真に開花することができるものと思えます。

△編集部付記▽ 本稿の筆者である長谷川進氏が十月十七日に死去された。本誌の良き協力者であり助言者であった先生が、いくつかの約束を果たされることなく亡くなられたことを真に残念に思います。本稿は、昨年のアナキズム研究センター主催の夏のセミナーでの講義をまとめていただいたものです。御冥福を！